

2010年代の外国人留学生のSNS利用、ニュース視聴、異文化適応 SNS Usage, News Browsing and Cross-Cultural Adaptation of International Students in the 2010s

中村 隆志¹, 黄 偉明²
Takashi NAKAMURA and Weiming HUANG

¹新潟大学人文学部

²新潟大学現代社会文化研究科

Faculty of Humanities, Niigata University

Graduate School of Modern Society and Culture

Abstract The aim of this report is to discuss about SNS usage of international students' and their cross-cultural adaptation. Accompanying with the spread of mobile phone, the world-wide media evolution has influenced not only general people's management of human relationship but also socio-cultural life of international students. The survey was conducted to measure international students' SNS usage and their adaptation to host country. And they were asked about the reason for browsing native mass media news and host country's media news. The correlation means that the change of media environment enabled international students to contact their native culture frequently and influenced their cultural adaptation. The reason for the selection of new source suggested that their perspective of interest should be correlated with SNS usage.

キーワード SNS, 外国人留学生, 異文化適応

1. はじめに

本研究は、外国人留学生のメディア利用、SNS利用と異文化適応との関連を調査するものである。世界的な留学生獲得競争の中、日本国内の大学における留学生数は増え続け、在留手続きの簡素化や住環境の整備などが実施されており、彼(女)らとりまく留学環境は、大きく改善され続けている[1]。一方で、彼(女)らはもうひとつの環境変化の中にある。それは、世界的なメディア環境の変化である[2]。とりわけ、ケータイ(携帯電話、スマートフォンを含む)の高機能化と世界的な普及は、彼らの人間関係の構築/維持管理を大きく変化させており、留学先での社会生活、文化生活は、かつてと様変わりしている。留学生にとって、ホスト国の人間との信頼関係の構築は、留学の成否に関わる重大事であり、最も重要なツールとしてのケータイの使い方は、そのキーポイントとなる。そのため、外国人留学生のケータイの利用実態を理解する必要があるのは、当然のこと、異文化適応を停滞させるような使い方には警鐘を鳴らすべきであると考え。このような方針を踏まえ、彼(女)らのSNS利用とニュース視聴の実態に注目し、異文化適応との関連を調査する。

2. 留学生と「グローバル化」

2010年代の大学に於ける留学生を語る際に、どうしても外せないのが、2008年に発表された「留学生30万人計画」である[3]。これは、「日本を世界により開かれた国とし、アジア、世界間のヒト・モノ・カネ、情報の流れを拡大する「グローバル戦略」を展開する一環として、2020年を目途に30万人の留学生受入れを目指すものです」と謳われているように、日本のグローバル化に寄与することを、その主な狙いと

して策定された。

しかし、主要な世界の大学ランキングを公表しているTHE (Times Higher Education) は、2010年から、大学評価の項目に於ける「留学生数」の重みを2.5%に引き下げている[4] (日本版の評価[5]とは重みづけが異なる)。このことは、世界的な留学生獲得競争が進展してゆく中で、単に数を増やせば良いという風潮を乗り越える必要性が顕在化していることを意味している。

また、2017年現在では既に珍しくなくなっているが、世界の主要都市におけるテロ活動は収まる気配はなく、また、世界の難民問題はますます難局化している。このことに呼応するかのよう、保護主義を採用するか否かが、先進国における政治の争点としての重みを増しつつある。「グローバル化」という言葉の現在の使われ方を見てみれば、かつての理想的崇高さは薄くなりつつあると言って良いだろう。

そのような世界情勢の中においても、国内では、進行中の政策により、外国人留学生の数は増え続けている一方である。彼(女)らといかなる関係を築けるかが、2010年代の大学に問われていると言えるだろう。大学内の留学生センター等や各種学会あるいは大学外の留学生支援団体を含め、様々な機関が、留学生との関係作りのための研究と実践を行っている。それらの取り組みは、次々と成果をあげているが、その一方で、1990年代以降、メディア環境は、大きな変化を繰り返しており、とりわけ、ケータイの普及と発展は、全ての人々の人間関係のマネジメントの仕方そのものを大きく変えており、その影響は、留学生も例外ではない。世界規模でのメディア環境の変化により、留学生を取り巻く環境はかつてと全く異なっていると言っ

て良いだろう。

3. 外国人留学生のメディア環境の変化

ケータイ端末の世界的な普及と画一化（つまり、スマートフォンの流行）が進んだ結果、留学生達のメディア環境が大きく変化した。その変化は以下のようにまとめることが出来る。

1. アドレス帳、メールなどのクラウド化による母国の人間関係の維持
2. 無料通話ソフト、定額制料金の普及による低コストの母国との通話・連絡
3. 端末の多言語化による、メールソフト、ブラウザ等の母国語での使用
4. マスメディアによる世界的なニュース無料ネット配信の増加と定着

つまり、彼(女)らは、ホスト国に渡って間もなく、留学前の使用履歴を含めたケータイの利用環境を、クラウド経由で復元することができるため、留学前に母国で得た連絡先やメール履歴を、留学先で100%復元可能であり、引き続き、ケータイによるコミュニケーションを持続することが出来る。また、ほとんどの大学で整備されている無線LANを無料で用いるか、あるいは定額契約の範囲内で、母国の保護者や旧友と繰り返し通話・連絡することが可能である。2010年代のケータイ端末は、標準で多言語対応しており、まるで、母国に居るかのようになり、母国語表示のソフト・母国語入力可能なブラウザ・アプリ等によるコミュニケーションと情報収集が可能である。また、母国のマスメディアが発するニュースやその関連ニュース、過去の動画などを毎日のように視聴することが可能であり、意見や感想を共有することも容易である。

このことは、彼(女)らが、ホスト国に滞在しながらも、留学前に培った人間関係を保ち続け、かつ、様々なニュース配信や意見交換の場を利用することにより、母国の人間関係、母国の価値観、母国の文化に長時間接することができることを意味している。2010年代に顕在化しているこのような状況は、ハイコストな母国との連絡を慎み、母国の文化的営みから遠く隔たった地で、異なる文化、異なる価値観に晒されながらも適応することを試み続けるプロセスを通じて、飛躍的な成長を遂げると期待されてきたかつての「留学生」像とは全く異なるものであると言えるだろう。

4. 留学生の異文化適応とメディア利用

Rui and Wang(2015)[6]は、adaptationの指標にAUM (Gudykunst, 2005) [7]、さらにその因果的帰結としての社会文化的適応、心理学的適応をそれぞれ用いて、留学生のSNS利用とadaptationの相関を検証した。156名（男女比64:92、平均年齢約24才、アメリカ滞在期間平均約2年、33ヶ国）の留学生にアンケートを行い、SNS経由で頻繁に会話する相手について、被験者毎に、ホスト国人/母国出身人、及び、アメリカ国内での近隣住民/遠方住民の2つの指標で分類し

て割合を導きだし、彼(女)らのSNSの利用実態を会話相手の属性に従って数値化している。相関の検証の結果、ホスト国言語（ここでは英語）の熟達度がUncertainty reductionと異文化適応（社会文化的適応と心理学適応の合算）に有意に相関していること、SNSの相手における近隣住民の比率の高さがUncertainty reductionと有意に相関していること、近隣のホスト国人の友人の比率がUncertainty reductionと有意に正の相関を持つ一方で、近隣の母国出身人の友人の比率は、Uncertainty reductionと負の相関を持つことが示された。

Forbush and Foucault-Wellers(2016)[8]は、アメリカに渡った中国人留学生を調査対象とし、留学前後のSNSのメンバーの変化（人数とアメリカ人の割合）とadaptationの相関を検証した。120人（男性64、女性53、未回答3、18才以上、アメリカ滞在歴1年以上）の留学生にアンケートを行い、渡米前のSNSの利用状態、渡米直後と半年以上後の2つの時期の交友関係の状態（頻繁に会う友人全体の数、アメリカ人の友人の数）、adaptation(socialとacademicの両方)について、相関を検証した。渡米前のSNS利用については、渡米直後の友人の数とアメリカ人の友人の割合の両方とに正の相関が導かれた。その一方で、adaptationについては、渡米直後のアメリカ人の友人の割合と強い相関をもつものの、友人の数との間には相関は見いだされなかった。このことから、Forbush and Foucault-Wellers(2016)は、留学前の準備として、ホスト国の受け入れ地域の人々と予めSNSでのやりとりを行っておくことを推奨する（と同時に、中国本土のSNS接続に関わるネットワーク管理に再考を求めている）。

Rui and Wang(2015)の結論は、ホスト国の言語に堪能で、近隣に住むホスト国人の友人が多いほど、異文化適応度が高い、という、いわば当然の帰結を再確認したものとも言える。しかし、ここで注目すべきは、これら留学生にとって好ましいコミュニケーションにとっても、逆に母国出身者同士のやりとりに終始するような好ましくないコミュニケーションにとっても、SNSが重要な中継役を果たしている、という点である。SNS利用の時間や友人の数など、表面的な利用状況と異文化適応を結びつけるだけでは、彼(女)らのコミュニケーションの実態を理解するには到らない。Forbush and Foucault-Wellers(2016)は、留学前の準備段階としてのSNS利用の重要性を訴え、留学後のホスト国の友人づくりへの準備段階としての有用性に焦点を絞った論を展開している。ここでも、SNS利用は、友人の数や時間などの「量」が問題なのではなく、日常的なface-to-faceコミュニケーションをサポートするような「質」の高い利用方法の意義を提唱する。

上記2つの論考は、留学生のadaptationの向上にむけての王道的な解決法（ホスト国の友人と頻繁にface-to-faceで交友状態を持つ）に対して、SNS活用をいかにフィットさせるか、という利用例の提示を行っていると言って良いだろう。しかしながら、3章で述べたように、メディア環境は世界的に変化しており、SNSは、かつてと異なり、友人との連絡ツール、情

報交換の場としての役割以上の利用法が常態化している。とりわけ、留学生にとって、注目すべき点は、2点である。1点目は、3章で述べた1,2,3の性質から、母国に住む家族や幼なじみなどの旧友とも常時連絡がとれる環境にあり、かつ、彼らとの連絡ツールもまたSNSの同じプラットフォームから利用することが可能である点である。2点目は、3章で述べた第4の性質から、留学生の一部のSNSユーザが、情報摂取の入り口として、マスメディアのニュース番組ではなく、母国のSNSサイトを活用するようになっている点である。彼(女)らは、それらサイトを通して、母国のマスメディアが発する新しいニュース素材を毎日のように(無料で)追いかけることが可能になっている。留学生による「質」の高いSNS利用法とadaptationを論ずる際には、この2つの効果もまた、考慮されて然るべきと考える。

5. 調査

(1) 調査概要

新潟大学の中国人留学生150名を調査対象とし、最終的に回収した有効回答は107名であった。時期は2016年7月から9月まで、調査協力者の男女比は37:70であった。留学生の言語能力による影響を避けるため、調査票は原文(英語)を中国語に翻訳して作成した。調査票の信頼性を確認するため、本調査を行う前に、6名の大学院留学生(男女各3名)に予備調査の回答に協力してもらい、質問紙を修正・改善した。

(2) 調査項目

SNSの言語選択、SNSの連絡相手の選択、一般的なニュースのソース選択、ニュースソースの選択理由を以下のような文言で質問した。

- 問1 母国語のSNSを平均どのぐらいの時間で利用していますか？
- 問2 日本人の友達と直接連絡を平均どのぐらいの時間で行っていますか？
- 問3 日本に住む母国出身の友人と直接連絡を平均どのぐらいの時間で行っていますか？
- 問4 母国に住む人と直接連絡を平均どのぐらいの時間で行っていますか？
- 問5 母国のマスメディアから発信されるニュースを平均どのぐらい視聴していますか？
- 問6 日本のマスメディアから発信されるニュースを平均どのぐらい視聴していますか？

上記問1から問6までの回答については、以下の8段階の選択肢を設けて、回答を要請した。

- 一日に4時間以上
- 一日に2-4時間以内
- 一日に1-2時間以内
- 一日に30-60分
- 一日に10-30分
- 週に1時間以内

- 月に1時間以内
- まったくしない

また、被験者達がニュースソースを選択する際の理由について、以下のような選択肢から複数回答を許容する形で回答してもらった。各選択肢の文言については、事前に本調査の被験者と別の留学生に行ったインタビューの回答例から作成したものである。

問7 あなたが、母国語のニュースを視聴する理由は何ですか。(複数回答可)

選択肢は以下のa-hを呈示した。

- 母国の発展と自分の利益が関わるから。
- 母国の出来事を知るため。
- 母国の報道の方が信頼できるから。
- 家族が母国にいるから。
- 母国にいる友人たちが何を語り合っているかを知るため。
- 同じ留学生同士での共通話題を探するため。
- ホスト国の言葉やニュースの内容が分かり難いため。
- その他： _____

問8 あなたが、ホスト国語のニュースを視聴する理由は何ですか。(複数回答可)

選択肢は以下のa-hを呈示した。

- 国際的な情勢の変化を知るとは、自分の利益と関わるから。
- ホスト国での出来事を知るため。
- ホスト国の報道の方が信頼できるから。
- 自分の考えはホスト国と近く、受け入れやすいから。
- ホスト国がどのように母国を報道するのかを知るため。
- ホスト国の友人との共通の話題を探するため。
- ホスト国の言葉を勉強するため。
- その他： _____

さらに、異文化適応の指標として、Li et al. (2013)のAcculturation Index[9]、並びにRui and Wang (2015)が用いたsociocultural adaptation[6]を用いた。

6. 結果と考察

問1については、母国語のSNS使用時間の平均値を閾値として被験者を分割して、異文化適応の設問から得られた回答を比較し、その差を検証した。問2と問3については、留学先の日本人の友人と母国出身の友人との連絡頻度を比較して被験者を分割して、問3と問5については留学先の日本人の友人と母国に住む人ととの連絡頻度を比較して被験者を分割して、問6と問7についてはホスト国と母国とのマスメディアの視

聴時間の大小を比較して被験者を分割して、それぞれ、異文化適応の度合いの差を比較検証した。その結果、問 1 の母国語 SNS 利用の多い者と少ない者の間に、また、問 2/問 3、問 2/問 5、問 5/問 6 の回答の大小で分類した被験者間に異文化適応の度合いの有意差が確認された。

また、母国語(問 7)/ホスト国語 (問 8)のニュースを視聴する理由についての回答について、問 1、問 2/問 3、問 2/問 4、問 5/問 6 のそれぞれに分割した被験者間で、相関のある選択肢がそれぞれ得られた。各回答は被験者個人のパーソナルな関心事から発した事情に終始するような理由から、国際的な視点に立って母国とホスト国の双方の関係と利益に関わる視点を持つ理由までであるが、これらが特徴的な相関を呈している。つまり、俯瞰的な眼差しを保ったままバランスを考慮してニュースソースを選択する被験者と、個人と身近な者との交友状態の持続や利益の保持を目標としてニュースソースを選択する被験者の双方が存在し、それが SNS 利用と相関していることが確認された。

留学生にとって、SNS がホスト国との交友関係を促進し、多様な価値観との出会いを提供するものとなるような喜ばしい事例がある一方で、同じ SNS でも、母国との人間関係や母国出身者とのやりとり以上の拡がりを作らず、留学前に得た関心事を留学中にも継続させてしまっているような停滞的事例もまた存在する。これらの相反する事例が異文化適応度にも強く相関することから、留学生にとって、SNS の利用の仕方を振り返り、留學生活の重要な役割を果たしているという認識を持つことが重要であると考えられる。

7. まとめ

モバイルコミュニケーションの様々な論者が、ケータイや SNS の利用について、身近で親密な相手こそ、その関係をスムーズに継続するために、コミュニケーションが頻繁に行われるようになること、つまり、多くの人々が親密な人間関係を維持するために多大なコミュニケーションコストを費やすようになることを説いている(例えば、Ling and Donner, 2009; Campbell, 2015) [10,11]。留学生にとって、留學生活の目標の一つが、ホスト国の友人との信頼関係の構築/維持にあるのであれば、SNS を利用したコミュニケーションをいかに立ち上げ、それを継続するかが、目標達成のキーポイントとなる。コミュニケーションコストを、ホスト国の人間との関係作りに多く費やすことが、外国人留学生にとって好ましいはずである。現在のケータイは、容易に留學前の母国の人間関係を維持し、母国が発信する情報を毎日のように継続して受けて、そのフォーラム的コミュニケーションに参加し続けることさえ簡便である。交友関係と多様性を拡げることも、それを停滞させるのも、同じケータイであり、SNS であることが、留学生のそれぞれに強く意識されるべきであると考えられる。

参考文献

- 1) 独立行政法人日本学生支援機構, 留学生支援のページ, http://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/index.html 最終アクセス 2017/06/29).
- 2) 黄偉明 (2016) 「留学生のメディア使用と国際報道の受容・異文化適応」『現代社会文化研究』No.62, 109-125.
- 3) 文部科学省公式 HP, 政策・審議会, 審議会情報, 中央教育審議会, 大学分科会, 『留学生 30 万人計画』の骨子」とりまとめた考え方に基づく具体的方策の検討, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkou/1249702.htm (最終アクセス 2017/06/29).
- 4) Times Higher Education, World University Rankings 2016-2017 methodology, <https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/methodology-world-university-rankings-2016-2017#survey-answer> (2017/06/29 final access).
- 5) THE 世界大学ランキング 日本版, ランキング指標, <https://japanuniversityrankings.jp/method/> (2017/06/29 final access).
- 6) Jian Raymond Rui, Hua Wang (2015): Social network sites and international students' cross-cultural adaptation, *Computers in Human Behavior* 49, 400-411.
- 7) Gudykunst, W. B. (2005): An anxiety/uncertainty management (AUM) theory of strangers' intercultural adjustment. In W. B. Gudykunst (Ed.), *Theorizing about intercultural communication* (pp. 419-457). Thousand Oaks, CA: Sage.
- 8) Eric Forbush, Brooke Foucault-Welles (2016): Social media use and adaptation among Chinese students beginning to study in the United States, *International Journal of Intercultural Relations*, 50, 1-12.
- 9) JiaQi Li, Xun Liu, Tianlan Wei&William Lan (2013): Acculturation, Internet use, and psychological well-being among Chinese international students, *Journal of International Students*, Vo.3 (2), 155-166
- 10) Ling, R., & Donner, J. (2009): *Mobile communication*. Cambridge: Polity Press.
- 11) Campbell, S. W. (2015): *Mobile Communication and Network Privatism: A Literature Review of the Implications for Diverse, Weak, and New Ties*, *Review of Communication Research*, Vol.3, No. 1.